

## 戦時下の共愛女学校の一断面（2）

### 朝鮮人卒業生の経験から

大嶋 果織・呉 宣児

#### キーワード

共愛女学校 戦時下のキリスト教学校 朝鮮人留学生 周再賜 李淑礼

#### 要旨

1942（昭和 17）年に共愛女学校 3 年に編入学し、1944（昭和 19）年に卒業した李淑礼（Lee Suk Re）による自伝『大同江に浮かべる手紙』が 1997 年に韓国で出版された。李淑礼は共愛女学校卒業後、同志社女子専門学校に進学。しかし、戦争が激しくなったため、1945 年春、生まれ故郷の現在の北朝鮮に帰国。戦後はソウルの梨花女子大学で学び、アメリカに留学。初等数学で博士号を取得してソウルに戻り、1954 年から 1989 年まで梨花女子大学で教員として活躍した女性である。全 369 ページにわたる自伝では、自分の人生に大きな影響を与えた人物として共愛女学校校長・周再賜（しゅう さいし）を挙げ、その教育実践について 18 ページにわたって紹介している。その内容を紹介しながら、戦時下の共愛女学校の教育を検討する。

#### はじめに

共同執筆者の一人、大嶋果織が 2022 年度共愛学園前橋国際大学共同研究費<sup>1</sup>を得て、1928（昭和 3）年から 1947（昭和 22）年までの台湾ならびに朝鮮出身の共愛女学校同窓生 28 名<sup>2</sup>の消息を追ったところ、1944 年卒業の李淑礼の自伝が 1997 年に韓国で出版されていることがわかった。原題は「대동강에 띄우는 편지」(보이스사)、日本語に訳すと『大同江に浮かべる手紙』（ボイス社）である。

同書を購入した大嶋は、韓国語を母語とする呉宣児に内容の精査を依頼。その結果、全 5 章 369 ページの内、最後の章「5 生の意味を探して」の中の一節「さまざまな質問と共愛の思想」に、18 ページにわたって李淑礼の共愛女学校での経験がまとめられていることがわかった。そこで、本稿では、呉の日本語訳を元に、呉が李淑礼の経歴を、大嶋が李の共愛女学校での経験をまとめ、最後に李淑礼の人生と戦時下の共愛女学校の教育について、それぞれの視点から気づいたことを述べる。

## 1 李淑礼の経歴

『大同江に浮かべる手紙』（以下、本書）の巻末に挙げられた著者略歴を中心に、本文から読み取れる情報を補足して李淑礼の経歴をまとめると、以下のようになる。

李淑礼は現在の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）平壤市内を流れる大河・大同江（テドンガン）の中州、豆老島（トゥル島）の出身である。生年は本書で明らかにされておらず、また、共愛女学校の学籍簿も空襲で焼失してしまっているため、現時点では不明である。しかし、共愛女学校 3 年編入という事情や、本人が「晩学」と述べていることを考えると、1927 年もしくはそれ以前の生まれであろう。

李が故郷を出て日本に渡るのは 1942 年のことである。キリスト教会での活動を通して大勢の大学生に出会い、社会の一員として働くためにはより高度な勉学が必要と、渡日を決めたのだった。共愛女学校を訪ねた李は 3 年編入を許され、2 年の学びの後、1944 年 3 月に卒業する。李は医学方面に進みたかったが、朝鮮出身者には医科理科系への道が閉ざされていたため、校長・周再錫の勧めで同年 4 月に同志社女子専門学校に入学。英文学を専攻する。極貧のなかで学業を続けて 1 年次を修了したものの、戦争の激化に伴って、1945 年春には全学生が軍需工場に動員されることになったため、既に危険だった玄界灘を渡って朝鮮へ戻ることを決意。途中、警察の尋問を受けるなど、多くの困難に出会いながらも豆老島の実家まで帰り着いた。

日本敗戦すなわち朝鮮解放後の 1945 年 9 月、ソウルの梨花専門学校が大学になったことを知り、李は再び家族と別れて単身で危険な 38 線を越え、宣教師等に助けられながらソウルに向かう。同志社女子専門学校での 1 年が認められ、梨花女子大学英文科 2 年に編入学。1947 年 6 月に卒業する。

1947 年 9 月 27 日、キリスト教関係の奨学金を得て、約 20 名の学生（内、女子学生は 5 名）と共に米国の軍艦に乗って渡米。Adrian College（ミシガン州）で英文学を学び、学士号（B.A.）を取得（1949 年 8 月）。Wellesley College（マサチューセッツ州）の The Wellesley institute for Foreign Student 夏期プログラムに参加した後、奨学金を提供していたキリスト教団体の要請によって Cornell University（ニューヨーク州）の大学院研究課程で農村社会学を（1950 年 6 月）、Hartford. Seminary（コネチカット州）で宗教教育を学び、修士号（M.A.）を取得（1952 年 5 月）。この時点で奨学金提供団体から帰国命令が出るが、より大きな仕事をするために勉学を続けたいと考え、自ら奨学金を探して Boston University（マサチューセッツ州）の大学院課程に進学。最終的に 1954 年 6 月に University of Iowa（アイオワ州）から初等数学で博士号（Ph.D.）を授与された。

こうして 7 年間の米国留学生生活を終えた李淑礼だったが、1950 年から 53 年まで続いた朝鮮戦争によって祖国は 38 度線で北と南に分断されたままとなり、故郷の豆老島に戻るができなくなってしまう。1954 年 9 月、ソウルに戻った李は梨花女子大学校師範大学の助教授に就任するが、家族の消息は分からず（後に兄と再会）、李は 38 度線の南側で、たった一人で生きていくことになった。

戦後の貧しく混乱した社会の中で、李は国のため社会のために仕えようと大学教育に取り組み、1955年には同大学副教授、58年には教授に昇進。また、1955年から72年まで17年に亘って、梨花女子大学校師範大学付属国民学校の校長を務める。

特に、初等教育機関である国民学校の運営に使命を感じ、アメリカで勉強した教育理念を実践しながら子どもが自由に過ごせる実験学校をつくろうと献身的に働く。しかし、当時の軍事独裁政権が目指す教育制度に対抗する形になったため、常に見張られ、介入され、最後には辞表を出さざるを得なくなってしまう。この期間に李は2度にわたって渡米。Merrill-palmer Institute (ミシガン州)の研究過程で児童学を学び(1965年2月)、1969年から70年までUniversity of South Dakota(サウス・ダコタ州)の招聘教授として研鑽を積んだ。なお、University of South Dakotaでは1973年から74年まで、客員教授も務めている。

再びソウルに戻った李は、1975年から78年、梨花女子大学校師範大学教育学科の科長を、78年から81年、梨花女子大学校教育大学院院長を務める。この間、1976年7月から77年8月まで、Harvard Graduate School of Educationで乳幼児教育プログラムセミナー研究課程を修了し、幼児教育資格証を取得した。

1980年代に入ると民主化運動の高まりの中で、学生運動がそれまで以上に活発に展開され、大学の授業がなりたたなくなっていく。その状況に苦痛を感じていた李はいったん国を離れて今後の方向性について考えようと、1985年から86年にかけて米国防大学(カリフォルニア州モントレー)で韓国語教育をテーマとして研究を続ける。結局、李は、すぐに大学を辞めるのではなく、これまでの教育実践、教育理念をまとめる作業をしてから引退しようとして決心して帰国。引き続き梨花女子大学校に勤務しながら1989年『初等教育の理論と実際』を執筆。その年の8月に梨花女子大学校を引退した。本書は引退から8年後の1997年に上梓されている。(呉宣児)

## 2 「さまざまな質問と共愛の思想」の概要

本書第5章には「さまざまな質問と共愛の思想」という小見出しが付けられた節がある。その中で李は、教え子たちからしばしば投げかけられる「なぜ結婚しなかったのか」<sup>3</sup>という問いに答える形で、共愛の教育について述懐している。

この節の流れは大きく6つに分けられる。その概要をところどころに筆者のコメントを挟みながら、まとめてみよう。小見出しは筆者によるものである。また、( )内は原著の該当ページである。

### (1) 共愛女学校に入学するまで (pp.333-335)

李は、自分が結婚しないまま生きてきたことの理由の一つに「時代的な背景」を挙げる。子ども時代、日本の植民地であった朝鮮には何よりも自由がなかった。その中で、若い男女は祖国を取り戻すために何かしなければならないと「心の中で情熱を燃やしていた」のだった。「開拓精神と改革精神に燃えた時代」だったと李は言う。

祖国のために何かしたい。そうした熱い思いをたぎらせていた李には、結婚して主婦に

なるという生き方は「安逸」で、幸福を与えてくれるとは思えなかった。また、結婚して家庭に入った友人が幸せにも見えなかった。そこで、自分は結婚しないで、社会の中で、社会の一員として仕事をして生きていこうと決心したのであった。

しかし、そのためには勉強しなければならない。さらに、勉強するためには家庭から脱出しなければならない。「家の中で楽に過ごしては、勉強する機会が与えられる可能性はない」、「家を出て、自分の人生を自分で設計しなければならない」と李は考えたのである。

こうした考えを持つようになった背景には、キリスト教会での活動があると李は言う。教会の活動を通して多くの人々、特に「勉学に取り組む大学生や、夏休みに農村に啓発活動をしに通う大学生」と接触するようになり、「勉強を続けることは容易ではないけれど、不可能なことでもない」と考えるようになったのだ。こうして李は家族の許可が下りるのを待って、「いよいよ事を起こしてみよう、とりあえずやってみよう」と日本に向けて旅立った。

しかし、なぜ日本だったのか。李は書いていないが、当時、レベルの高い教育を受けようと思えば宗主国・日本に行くしかなかったのだろう。裏返して言えば、被植民地人は現地で質の良い教育を受けられなかったのである。それは植民地政策の一環であった。李は言う。「敵のように思われるその国にいて、彼らを知り、学ばなければ、彼らに勝つことはできない」。つまり李は、敵地に乗り込むような感覚で日本に渡ってきたと言える。その敵地で、李は、「その学校は本当に良い学校で、良い教育を受けたと自信をもって言えます」と後に述懐するような学校に入学したのであった。李は言う。「神さまが導いてくださることを確信したので、何も持たずに飛びこみました」。「神さまの祝福が共にあり、道を開いてくださいました」。

## (2) 共愛女学校の教育の特徴 (p.335-337)

その「良い学校」は群馬県の共愛女学校だった。なぜ、共愛女学校だったのか、李はその理由を書いていない。李の教会活動が活発なものであったことを考えると、おそらく宣教師の助言があったのだろう。助言をした人は、共愛女学校の校長・周再賜が台湾人であり、教育者として信頼できる人物であることや、台湾や朝鮮からの留学生がすでに何人も学んでいることを知っていたのではないか。李ははるばる群馬県までやってきて、校長に面会して入学の希望を伝え、3年次への編入を許可される。

李は共愛女学校で2年間を過ごし、1944年3月に卒業するが、学校の教育の特徴を次のように述べている。

「学校の名前は共愛、互いに愛し合うことを理念にして、真摯なる教育をする目的で、犠牲と奉仕という校長先生の一貫した生活の哲学が学校を支配していました。その学校は、学生たちひとりひとりに合わせて指導することに専念していました」。

そして、女学校の2年間で次のような変化が自分に起こったと言う。

「この学校でわたしは目を覚まし、この世を見るようになり、これから歩いていく道が

明るく見えるようになりました。この学校がなかったら、わたしは今日のわたしになれなかったと思います。ここでわたしは教育者になろうと決心し、その後も校長先生のような教育者になろうと努力しながら生きてきました。わたしの教育哲学と信念は校長先生との出会いの中で生まれました。祖国を取り戻し、祖国のために尽くして、祖国の市民教育に貢献しようとしたのです」。

朝鮮人を抑圧する敵の国で、朝鮮人としてどう生きるのかという方向性を示されたというのである。そうした教育のありようと、校長の周再賜が台湾人であったことは切り離せないと思ふのだが、不思議なことに李は、校長が台湾人であったことはおろか、本文の中では「校長先生」と呼ぶばかりで、周再賜の名前を記していない（巻末の写真集の中にのみ、顔写真と共に「周校長はいつも実践なさる真の教育者でいらっしゃった」という但し書きがある）。なぜ、校長が台湾人であることを記さなかったのか、なぜ固有名詞を挙げなかったのか、今後解明したい謎である<sup>4</sup>。

さて、経歴で紹介したように、李は医学方面に進学したいと考えていた。しかし、日本の政策がそれを許さなかったので<sup>5</sup>、周校長は考え方を变えて英文科に行くように李に勧める。「間もなく英語が必要になる時代がくるから」と。こうして李は京都の同志社女子専門学校に進学する。李は言う。「校長先生は日本が負けることを見通しておられました。前をしっかりと見ることができる預言者でもありました」。

### (3) 女学校での生活 (p.337-341)

戦前の多くのキリスト教学校がそうであったように、共愛女学校も寮生活を大切にしていた。学生と教員が生活を共にすることによって、全人的な教育をしようと考えていたのである。李の時代より 5 年ほど遡るが、『共愛学園百年史』によると、1938 年度は全学生 270 名中寮生 57 名。1939 年度は 272 名中 71 名。寮は 5 棟あり、10 名ほどの教員が寮で起居し、校長住宅も学内にあった。また、1939 年度は寮生 71 名の内、朝鮮人は 3 名、台湾人は 7 名だったという<sup>6</sup>。

李も寮で生活した。だから周校長の日常に間近に接することができた。そんな李がもっとも強く感銘を受けたのは、周校長は言葉と考えと行動がいつも一致していたこと、どんな仕事にも一生懸命取り組んでいたことである。

李は言う。「先生はいつも早朝に起きて事務室にいくのですが、その時は必ず寄宿舍によって、学生たちが無事に起きているかを確認しました。戦争中なので、夜の間に何事が起きていないか心配だったのかもしれませんが、今、考えてみると、ほんとうに学生のために全身全霊を注いでいたのだと思います。寄宿舍にいる学生たちを自分の家族のように考えておられたのです」。

李は、周校長が指導した寮生活は健康的で規則正しい生活を習慣づけることに繋がったと高く評価している。その寮生活は毎朝、次のように始まっていた。

- ・鐘の音と共に早起きして、濡いたタオルで全身をマッサージする。
- ・布団を押し入れにしまい、部屋をきれいに掃除する。

- ・ラジオから流れてくる音楽に合わせて朝の体操をする。
- ・朝食のテーブルには上級生と下級生と教員が混ざって座り、テーブルでの礼儀を守り、出されたものをまんべんなく食べる。

- ・自分の部屋に戻って登校の準備し、自分の周りを点検してから部屋を出る。

寮では、上級生が下級生を指導できるように部屋割りがされていた。また、学生が登校する頃には周校長は庭で木々の剪定や花の手入れをしており、学生たちが「行ってきます」と挨拶をすると、笑顔で応えてくれたという。

こうした寮の生活に関しては、他の日本人卒業生も回想録等でしばしば言及しており、これまでの大学の周年史にも詳しく記述されてきた。しかし、この後、李が紹介する周校長の不思議な行動は、李だけの経験である。

ある日李は、周校長が両手で使用すべき剪定ばさみを片手だけで操っているのを見た。別の日には、片方の目を塞いで校庭を歩いているのを、さらに、両目をつぶったまま歩いている校長を見た。それぞれ不思議に思っ「先生、いったい何をしているのですか」と声をかけると、周校長は「事故で片手しか使えなくなった時のために、片手で剪定ばさみを操る方法を考えている」、「一つの目だけで生活できるよう工夫している」、「両目が見えなくなっても生活できるように練習している」と答えたのだった。最後の質問の時には、李は両目を閉じて歩く周校長の後をついていった。すると、「先生は校長室を簡単に探し出してドアを開けて入り、机椅子も不便なく探し出してお座りになり」、「何がどこにあるのか、両方の目がなくても分かるように、先生の部屋は徹底的に組織的に整頓されて」いたのだった。忘れられない出来事なのだろう。李はこの経験を 1 ページにわたって詳述しており、この時、「じっくり校長先生の生活全体を見守りながら、その通りにやってみようと決心」したと書いている。

そんな周校長は、楽しい校長でもあった。李は次のようにも述べている。

「校長先生は一週間に一回は教室で生徒とお弁当を一緒に食べながら、おもしろい話をしてくださったり、人生哲学を論じてくださったりし、卒業してから役に立ちそうな真理の言葉を聞かせて下さったりしました。それらは忘れられない美しい思い出です」。

#### **(4) 教育の 5 つの柱とキリスト教教育 (p.341-342)**

周校長は共愛女学校を「一貫した哲学の柱」すなわち「5 つの柱」で運営しており、それによって全ての難関を乗り越えて進むことができた和李は述べる。その 5 つとは、後半に李の説明を付けたまま紹介すると、以下のようである。

1. 人格の尊重。これは民主主義の教育の基礎です。
2. 自由と自治。自由に自分自身の生を生きていくという思想です。
3. 形式より精神。外から見えることより、精神的な面の価値を強調されました。
4. 労働の神聖さ。仕事をする姿を通して、先生は実際に見本をみせてくれました。
5. 犠牲と奉仕の精神。これを人生の基本価値と捉えていました。」

この 5 つの柱は、当時の学生の証言によると、毎朝朝礼で繰り返し話されたい<sup>7</sup>。そ

れだけではない。李は、「校長先生はこのような5つの理念の上に建てられた学校の実践者として、わたしたちの生活を支え、よいモデルになってくださいました」と述べ、周校長の5つの柱を実践していたと述べる。言葉と生活、思想と実践の一致である。

李はまた、「この5つの柱はイエス・キリストの精神ともいえる」と述べ、共愛女学校でのキリスト教教育について次のように語っている。

「忘れられないことを一つだけ提示しましょう。毎週水曜の夕礼拝は校長先生がリードしてくださいました。天気がよく季節がよい春や秋には、夕飯のあとに日没の光景を見るために川辺に讃美歌をもって散策に出かけます。天地がきれいな色に染まった瞬間、わたしたちは感傷に浸って、喉がいたくなるほど讃美歌を歌いました。各自、自分が好きな夕日に関する歌を歌ったのです。それは、宗教に帰依することができる時間でした。わたしたちは恵み深い創物主の技に感嘆の声をあげないではいられませんでした」。

「校長先生はキリスト教精神を自然に生活化できるように教育なさいました。感受性が旺盛な女学生時代、強要せずに、自然に興味をもって礼拝が待ち遠しくなるようにしてくださいました。讃美歌を歌い、夕日を楽しみながら過ごした時間…。その思い出はこれから先も永遠に、わたしの心の奥深くに残り続けるでしょう。この時代に受けた宗教教育が、大人になってからも真のキリスト者として生きることを可能にしてくれたと断言することができます」。

#### (5) 犠牲と奉仕の精神 (pp.342-344)

周校長の示した「5つの柱」の中で、李にもっとも大きな影響を与えたのは5番目の「犠牲と奉仕の精神」だったようだ。李は「共愛女学校で長い間、お手伝いさんとして仕事をしたおばあさんから聞いた話」が「わたしの教職生活の基礎になった」と述べ、その「おばあさん」の話を紹介している。

このおばあさんは30年の間、共愛女学校で掃除をはじめ、こまごました仕事を任されていたのだが、長い間不思議に思っていたことがあった。それは誰かが自分より先に来て、校長室と教師室のストーブに火を入れ、お茶をつくっていることだった。ある朝、隠れてみると周校長の姿がそこにあった。驚いているおばあさんに周校長は、「ぼくはこの学校ですべての人に仕える人なんです。おかしいことはありませんよ」と言ったという。この話を涙ながらに話すおばあさんの顔を見ながら、李は「真の教育者の姿勢とはどういうものか」、はっきりわかったと言う。それは『しもべの姿勢』で仕える人なのである。

李は、17年間、校長として働いた梨花女子大学附属国民学校で、「校長先生の働きの万分之一だけでも見倣い、そのように生きたいと努力し」という。実際に、時間がある限り、庭で木と花の世話もしたらしい。「私が庭園でバラを育て、手入れをするようすを附属学校の子どもたちに見せたかった」と李は述べている。

経歴で触れたように、軍事独裁政権下での附属国民学校運営は困難を極めた。そんな中で李は、「真のキリスト教徒として、また、真の教育者として生きた校長先生」が「いつも隣にいて励ましてくださっているように感じ」ていたという。李は、周校長の教育は、「わ

たしの生涯のうちでもっとも大切な宝であり財産であり、わたしの生命を維持する原動力」とまで言い切っている。

#### (6) 目標に向かって走ってきた人生 (pp.344-351)

以上のように、子ども時代にすでに、国のため民族のために働こうと決心して日本にやってきた李は、周校長との出会いの中で、「韓国のために犠牲をはらい、奉仕する忠実なしもべとして一生を生きようと決心」する。李は、独身のまま生きてきたのはその結果だと説明するのだが、「なぜ結婚しなかったのか」と質問する人たちは満足してくれない。さらに、恋愛もしなかったのか、寂しくなかったのか等と追及するのである。そこで李は、次のような説明を付け加える。

- ・アメリカでは長い間勉強に専念して、恋愛はもちろん、他のことを考える余裕がなかった。

- ・祖母から、男子を警戒せよと強く教えられてきたので、男子に対する拒否感があった。

- ・職業生活では、「針の穴の隙間も見出すことができないくらい、24 時間走り続け」、「全身全霊を尽くした」ので恋愛する時間はなかった。

- ・朝鮮戦争によって家族親族、昔からの友人たちと離れ離れになってしまったので、結婚への圧力がなかった。

- ・一緒に渡米した仲間には、祖国の建設に貢献したいという夢と希望に溢れた若い男子が大勢いた。年を重ねた今も彼らとはよい友人である。

そして、自分は祖国のために全てを捧げるという初志を貫徹したと思うので、自分の人生に満足していると述べ、目標に向かって走り、到達したという達成感に満足しながら人生を終えるだろうと語って本節を終えるのである。 (大嶋果織)

### 3 李淑礼と共愛の教育

#### (1) 原著を読んで—韓国人教員の視点から

李淑礼が日本に渡って勉強した 1940 年代は、朝鮮半島は日本の植民地だった。その時代に女性が家族同伴ではなく一人で留学を目的に来日したこと、また、戦後はアメリカへ渡って博士学位を取得し、帰国して梨花女子大学の教授として生涯を教育に捧げたこと、この二つの事実から裕福な家庭出身の「お嬢様」のイメージが先行する。しかし、実際はまったく異なっていた。

植民地朝鮮出身者としてこの時代を日本で生きるためには、制度的な差別や貧しさ、それも耐え難い空腹に耐え抜くほどの我慢強さと粘り強さが必要だった。しかも彼女は「親日派」ではない。「日本は敵の国だ」と考えているのである。そんな中で学業を続け、やり遂げたということは、「勉強したい・勉強しないといけない」という目標がそれほど強かったということだろう。家族の支援があっても成し遂げることが難しい道を、自ら切り開いていったエネルギーには感心させられた。

本書では彼女の家族の様子はあまり描かれていない。北と南に生き別れになったせいな



のだろう。しかし、大同江流域の豊かな自然の中で自由に過ごしながらか育ち、家族団らんの生活の中にいた雰囲気は原著からは読み取れた。また、彼女の家族はキリスト教信者であり、日本に渡るときも、38度線を越えて韓国へ渡るときも、アメリカに渡るときも、多くの宣教師やキリスト教会の助けを借りながら、困難な状況を切り拓いている。すべての期間において奨学金によって勉強を続けたが、貧困そのものの経済状況は大学教授になった初期の時期まで続いた。彼女の前半生は貧困との闘いであったとも言える。

共愛女学校時代を振り返った一節は他の部分とは異なり、貧しい生活や戦争の影響など、さまざまな苦労についての言及はなく、むしろ周校長の教育者としての様子に感動しながら学びを続けた様子が生き活きと描かれている。ひとときではあったが、彼女が幸福であったことを感じさせる部分である。教育者として献身するための哲学・心性が共愛女学校で養われたことをはっきりと意識しながら書いていることが印象的であった。

同志社女子専門学校時代に関する記述では、京都は本当に美しい町だったが、戦争がますます激しくなり、毎日のように空襲警報が鳴り、防空壕に入る時間が多く、経済状況もさらに悪化したという困難に関する記述が多い。ついには軍需工場に動員されることになったため、このまま日本で武器を作りながら爆撃を受けて死ぬか、朝鮮に戻りながら爆撃を受けて死ぬか、どちらかしかないと思うようになり、途中で死ぬ覚悟で朝鮮半島へ戻ることを選んだという。船は釜山港に無事到着したが、下船後警察に捕まり、危篤の父に会いに一時的に帰国したと言って難を逃れ、実家までたどりつく。女子学生だった李の決断力と行動力、そして機転はたいしたものである。

アメリカでの研究生活も生易しいものではなかった。その都度困難があり、奨学金をもらうために望まないテーマに取り組まねばならない時もあったが、それをも与えられた機会として受け入れて勉強し、広い知識を得るようになっていった。李の粘り強さと忍耐力を感じさせる部分である。

帰国してからも困難は続いた。李は自分の教育信念に基づいて、子どもたちを民主的な市民として育てるようなのびのびとした教育を展開したかった。しかし、戦後まもない韓国の著しい経済的貧困の中、教育の理想と現実のギャップになんとも挫折を繰り返すことになる。また、社会の経済状況が好転したと思ったら、今度は軍事独裁政権下の教育政策との闘いが待っていた。教育庁の監視を受けながらの教育実践は、周囲からやりすぎないように圧力を掛けられ、李にとっては泥沼の中を進むように感じられたに違いない。

どこをとっても、筆者は李の不屈の努力に感心させられたのだが、一か所、筆者との違いを感じた部分がある。それは、学生運動の部分である。李は、韓国全土に民主化運動が広がり、大学の授業がなりたたなくなっていくことを嘆いているのだが、筆者はちょうどその頃、大学生で民主化運動を担う側だった。大学生の立場と教員の立場では見方が異なるのだろう。その部分は世代ギャップを感じるころであった。

とはいえ、筆者は植民地時代から朝鮮戦争、南北分断と軍事独裁政権の時代を教育者として真摯に生きた李の生涯には頭が下がる。その土台をつくったのが、周再賜に導かれた

共愛女学校であったという事実に敬意を表したい。

(呉宣児)

## (2)「さまざまな質問と共愛の精神」を読んで一日本人教員の視点から

李淑礼は、周再賜の没後、周を記念して発行された『周再賜先生の生涯』(清水安三編、賜千会発行、1975 年)に「私の精神的父」と題する追悼文を寄稿している<sup>8</sup>。1 ページと少しの短い文章であるが、そこには「共愛の精神である愛、正直、誠実、犠牲、これらの言葉は教育者である私の中に生きて働いて」おり、「周先生は私の精神的の父」であると書かれている。なぜ李が周を「精神的父」と呼ぶのか、追悼文を読んだ時にはわからなかったが、本書を通して具体的に知ることができたのは幸いであった。

ただ一つ、気になったのは、李淑礼と他の学生との関係である。李は周校長との関わりは詳しく書いているが、同級生や寮生仲間のことにはまったく触れていない。苦労を重ねてきた李にとっては、日本人の女学生たちは「子ども」に見え、あまり交流はなかったのだろうか。また、日本人の女学生たちは李をどのように見ていたのか。そこで、筆者は同窓生たちの回想文を調べてみることにした。

1994 年に共愛学園同窓会が発行した『思い出の記 愛の園で』を読むと、1944 (昭和 19) 年卒業の I.K. さんが 3 人の朝鮮人学生との交流を思い出して回想文を書いている<sup>9</sup>。3 人の内一人は 4 年生に編入して、寮で部屋長をした先輩の K.G. さん、そして、同級生だった R.S. さんと李淑礼である。I.K. さんは特に R.S. さんとしたしかっぴらしく、彼女と土曜日の午後、寮で将来のことなど、いろいろと語り合ったそう。

1945 (昭和 20) 年卒の S.H. さんも同じ文集の中で寮の生活について書いている。その中で S.H. さんは、一学期に一度の帰宅日から寮に戻るときには日持ちのする入り豆や切り干しイモ等をリュックに詰め、自宅に帰れなかった朝鮮や台湾からの留学生のために白米のおにぎりを持って帰ったと述べている<sup>10</sup>。

また、2014 年に卒業生有志が作成した冊子『周先生時代の共愛の思い出』では、1948 (昭和 23) 年卒業の I.A. さんが 1944 年頃の思い出として、次のように書いている<sup>11</sup>。

「その頃の共愛は台湾や韓国からの方々も居り、韓国語は、読み方の発音や意味なども教えてもらったり致しました。そろそろ戦争がきびしくなると、次々郷里に帰りました。中には残った方も居りましたが、その短い間、毎日毎日、珍しい各地の地方の生活や習慣、勉強方法、音楽や衣装の数々、又、家族の事、食事、御料理の事、食べ物の違い等、あらゆる珍しい事を知ると『行ってみたいなあ!』。でも戦争中は無理なのですね」。

さらに、1944 (昭和 19) 年に共愛女学校に入学した横山貞子は、卒業後同志社女子大学英文科に進学し、後に大学教員となって活躍するが、1965 年に出版された『同志社の思想家たち』の中で「V デントン・周再賜」を魚木アサと共同執筆し、その中で自分が経験した共愛女学校の寮生活について次のように証言している<sup>12</sup>。

「敗戦前の共愛学園の寄宿舍には、もうひとつ、おもしろい特徴があった。植民地人の周再賜が校長だという条件のせいで、台湾、朝鮮、満州からの留学生が多かった。嘘のような話だが、戦争の激しい最中、この寄宿舍では朝鮮のチョゴリという上衣が流行してい

た。その頃当局で制定した標準服というものよりも、衿をリボンのように結ぶ、丈の短いチョゴリのほうが美しかった。朝鮮の女の子に裁ってもらった銘仙やかすりのチョゴリをモンペの上に着て、防空訓練をやった。私たちの一級上のクラスの級長は朝鮮人だった」。

以上のような証言に李淑礼の名前が登場するのは一度だけで詳しい記述はない。また、I.A.さんや横山貞子の回想は、I.K.さんが名前を挙げた3人の朝鮮人学生が卒業したあとの経験である。とはいえ、李淑礼の在学前後の時期に共愛女学校の寮では日本人学生と朝鮮や台湾からの留学生が互いに認め合い、親しくしていたことは確かであろう。

植民地の言葉や民族衣装が蔑まれていた時代に、それがうらやましがられていたという寮の雰囲気がなぜ可能だったのか。横山貞子は次のように分析している。

「植民地となった後進国からでてきて日本でまなび、さらにアメリカでまなんだ周には、日本を母国と考えさだめると同時に、その日本を西欧に比べれば後進国ととらえる視点があり、それが戦争中の『鬼畜米英』といったせまい考えかたに学生を陥らせない働きをしていた」。この視点は一方で、台湾や朝鮮の言葉や文化を蔑む姿勢を否定する役割も果たしただろう。李が意識していたかどうかはわからないが、周校長との直接的関係だけではなく、李を取り巻く共愛女学校の雰囲気も李に安心感を与え、彼女の学びを支えたのではないか。

さて、李と日本人同級生との交流に関わる資料はないかを探していたら、1982年3月に発行された共愛学園報第24号に、李と同じ年に卒業したI.M.さんが韓国を訪問した際の経験を書いていた。ガイドに依頼して李さんに連絡をとろうとしていたIさんに、李さんから深夜電話があり、共愛時代の思い出を1時間以上涙ながらに語り合ったという。旅程の都合でIさんは李さんと直接会うことはできなかったが、周再賜校長を中心に友愛の輪が広がっていたことを彷彿とさせる報告文だった。李とその他の学生の間にも豊かな交流があったことがわかって筆者は安堵した。

(大嶋果織)

## むすび

『大同江に浮かべる手紙』という書名には、生き別れになった家族への思慕の念が込められているように思える。向学心に燃えた朝鮮の少女が、日本の植民地時代を、そこからの解放の時代を、祖国の分断の時代を、軍事独裁政権に対する民主化闘争の時代を、朝鮮で、日本で、アメリカで、そして分断後の韓国でどう生きたのか、家族は知りたかっただろうし、本人も家族と語り合いたかっただろう。それは適わなかったが、李淑礼が若い日々を過ごし、その後の人生の土台をつくった共愛学園に本書が届いたことを感謝したい。本書の出版からすでに16年がたっているが、李淑礼のその後の消息を改めて追ってみたいと考えている。

**付記** 本稿で参考にした同窓会および同窓生有志が発行した回想録は一般流通を目的とした書籍ではないため、登場する人物名はイニシャルに変更している。

- <sup>1</sup> 2022 年度共愛学園前橋国際大学共同研究費。テーマ「共愛学園史に関する基礎的研究—特に創立期の三人の女性たち、および第 6 代校長周再賜をめぐって」、研究員 大嶋果織（代表、共愛学園前橋国際大学特任教授）、荒谷出（共愛学園中学高等学校宗教主任）、角田進（共愛学園宣教師館管理主任）、野口華世（共愛学園前橋国際大学教授）
- <sup>2</sup> 1945 年 8 月の前橋空襲で学籍簿が焼失してしまったため、同窓会誌『野の花』から抽出した名簿による。さまざまな証言から、28 人以外にも多くの朝鮮や台湾からの学生が学んでいたと思われる。
- <sup>3</sup> 李は、「なぜ結婚しなかったのか」「結婚しなくて、さびしくなかったか」「心理的な変化はなかったのか」「恋愛もしなかったのか」という 4 つを挙げているが、「なぜ結婚しなかったのか」という問いに集約できるだろう。
- <sup>4</sup> 共同執筆者の呉宣児は、推測に過ぎないが、と前置きしながら、ここで周再賜の本名と台湾人であるという出自を提示すると、「親日家の台湾人」というレッテルが貼られてしまい、周校長の実像が伝わらないと考えたのかもしれないと述べている。
- <sup>5</sup> 李淑礼より半年早く共愛女学校に編入学し、同じ年に卒業した朝鮮人留学生 R.S. と親しかった I.K. は、医学大学志望だった R.S. が「故郷の医専を受験することになり、卒業式を待たずに」帰国したのは、「当時、医専への入学者は男性の医者不足のため内地の方優先」だったからと述べている（『思い出の記 愛の園で』共愛学園同窓会発行、1994 年、pp.56-57）。ちなみに R.S. は後に韓国で医者になって活躍した。
- <sup>6</sup> 共愛学園百年史編纂委員会編『共愛学園百年史 下』学校法人共愛学園、2009 年 pp.309-315
- <sup>7</sup> 『思い出の記 愛の園で』の中で、昭和 15 年入学 19 年卒業の I.M. は、周校長は朝礼の時間に「人格の尊重、自由と自治、形式より精神、労働の神聖、犠牲の精神」という「5 本柱」を熱心に説いたと述懐し（p.52）、昭和 22 年卒業の N.S. は、卒業後に集まったクラス会で「5 本柱」が話題になったことに触れ、共愛で学んだことの中心に「5 本柱」があったと述べている（p.82-84）。朝鮮人留学生だった R.S. は「五本柱」の中でも「形式より精神」「労働神聖」の二つは周校長の生活の「生きていく魂」だったと言う（pp.63-64）。
- <sup>8</sup> 『周再賜先生の生涯』（清水安三編、賜千会発行、1975 年）pp.234-235
- <sup>9</sup> 『思い出の記 愛の園で』p.56
- <sup>10</sup> 『思い出の記 愛の園で』p.67
- <sup>11</sup> 『周先生時代の共愛の思い出』（同窓生有志作成発行、2014 年）p.26
- <sup>12</sup> 『同志社の思想家たち』和田洋一編 同志社大学生協出版部 1965 年 pp.227-228

## 文献

이 숙례 『대동강에 띄우는 편지』 보이스사 1997 년

清水安三編『周再賜先生の生涯』賜千会発行、1975 年

和田洋一編『同志社の思想家たち』同志社大学生協出版部 1965 年

共愛学園百年史編纂委員会編『共愛学園百年史 下巻（一）』学校法人共愛学園、2009 年

## 資料

『思い出の記 愛の園で』共愛学園同窓会発行、1994 年

『周先生時代の 共愛の思い出』同窓生有志発行、2014 年

共愛学園宣教師館資料室提供 昭和 3 年～昭和 22 年 留学生名簿

**謝辞**

李淑礼の著書を見つけてご提供くださった呉寿恵さん（在日大韓基督教会 元・キリスト教教育主事）、共愛学園の歴史に関する資料を提供してくださった共愛学園宣教師館管理主任の角田進さんに感謝します。

### **Abstract**

## **A cross-section of Kyoai Girls' School during the war time (2)**

### **From the experiences of a Korean graduate**

OSHIMA Kaori / OH Sun Ah

This article presents a cross-section of the Kyoai Girls' School during the war time. The second part is taken from the experiences of a Korean graduate. The autobiography, "Letter Floating on the Daedong River" by Dr. Lee Sook Re, who transferred to the third year of Kyoai Girls' School in 1942 and graduated in 1944, was published in South Korea in 1997. After graduating from Kyoai Girls' School, Lee Sook-Re entered Doshisha Women's College. However, as the war became more intense, she returned to her hometown of present-day North Korea after a year. After the war, she studied at Ewha Women's University in Seoul and then went to America to study. After earning a doctorate in elementary mathematics, she returned to Seoul and taught at Ewha Women's University from 1954 to 1989. In her 369-page autobiography, she cites Shiu Saishi, the principal of Kyoai Girls' School, as a person who had a great influence on her life, and describes his educational practices over 18 pages. While introducing the contents, we will examine the education at Kyoai Girls' School during the war.